

建築写真による歴史の記録と表現について

—戦後の民家写真集の分析を中心として—

中谷礼仁研究室

齋藤湧一郎

目次構成

I. 序論

- 0-1 研究の動機
- 0-2 研究の目的
- 0-3 研究の方法
- 0-4 既往研究

II. 本論

第1章 日本・建築と写真

- 1-1 写真という発明と建築
- 1-2 外国人写真家による写真
 - 1-2-1 ベアトの写真
 - 1-2-2 モーザーの写真
- 1-3 横山松三郎の写真
- 1-4 建築保存と写真
- 1-5 写真家の日本建築
 - 1-5-1 渡辺義雄と伊勢神宮
 - 1-5-2 石元泰博と桂離宮

1-6 小結

第2章 建築としての民家

- 2-1 民家研究のあけぼの、白茅会『民家図集』
- 2-2 民家という言葉、今和次郎『日本の民家』
- 2-3 最初の民家写真集、緑草会『民家図集』
- 2-4 戦後の民家調査
- 2-5 小結

第3章 建築写真家の民家

- 3-1 建築写真とはなにか
- 3-2 戦後民家写真とその時代
 - 3-2-1 写真史の1950年代
 - 3-2-2 建築史の1950年代
- 3-3 建築写真家の評価
- 3-4 建築写真家の方法と民家観
 - 3-4-1 平山忠治と民家
 - 3-4-2 二川幸夫と民家
 - 3-4-3 大橋富夫と民家

3-4 小結

第4章民家写真集の分析

- 4-1 地図における撮影場所のプロット分析
- 4-2 民家写真の類型分析
- 4-3 平面図における撮影位置と方向の分析
- 4-4 小結

II. 結論

第5章考察

謝辞

参考文献

図版出典

I. 序論

0-1 研究の動機

戦後日本全国を歩きまわり民家を記録した建築写真家たちがいた。平山忠治 (1909-2005) や二川幸夫 (1932-2013)、大橋富夫 (1932-2017) である。彼らはそれぞれの方法で民家を記録、そして表現した。それらの写真は当時の記録として貴重なものであり、表現としても美しいものである。彼らが現代建築の写真を撮影するいわゆる建築写真家であったことも興味深い。

0-2 研究の目的

本論の目的の一つは、写真という方法がどのように歴史的建築、さらには民家へと向けられていったのか、という歴史的な文脈を明らかにし、その特徴がどのように変遷していったのかを考察することである。

そして、戦後において建築写真家が民家をどのように考え、そして発見、表現したかを分析し考察することを二つ目の目的とする。

0-3 研究の方法

第1章では、建築と写真の関係について述べる。日本において歴史的な建築がどのような目的で写真に撮られてきたかを既往研究や関連文献からまとめる。

第2章では、民家という存在が建築学のなかでどのように扱われてきたかを、写真などの表現方法に注目しつつ、建築学における民家調査、研究の変遷を既往研究や関連文献からまとめる。

第3章では、戦後、民家を撮った建築写真家について論じる。まず建築写真、または建築写真家について述べる。次に、写真家の言説や関連文献から、彼らがなぜ民家を撮ったのか、対象とした民家の選び方、探し方、またどのように民家を捉えようとしたのかという「民家観」を明らかにする。

第4章では前章で扱った建築写真家の戦後民家写真集を対象とし3つの方法で分析を行う。まず日本地図上にプロットを行いその全国的な位置の特徴を明らかにする。次に、写真を撮影場所や切り取り方で類型し分析する。最後に平面図において詳細に撮影場所と撮影範囲を作図によって分析する。

0-4 既往研究

・清水重敦「建築保存概念の生成史」(中央公論美術出版　2013.2)
日本の近代化のなかで古建築への保存の概念の誕生と推移について論じている。第II部第1章では建築保存の運動のなかで「建築」の概念の成立と「建築写真」の表現の確立の関係について述べられている。

・金子隆一「写真の中の建築」全15回(『建築知識』1993-1994)
写真評論家の著者が世界と日本の写真史において、建築がどのように写され表現されてきたかをいくつかの時代において写真史を軸として論じている。

II. 本論

第1章 日本建築と写真

写真の発明は正確な遠近法と客観的な描写を可能とした。その視線は建築や都市に向けられた。

写真が日本に伝来したのは江戸時代の終わりであり、明治時代にかけて普及した。幕末から明治の時代にかけて外国人写真家や日本人写真家は都市風景を撮影した。この時期の建築・都市写真は大きく二つの時代背景とそれに対する目的があった。一つは、開国により外国人写真家が来日し、彼らによる異文化への興味、報道のためである。フェリーチェ・ベアト (1832-1909) や、ミハエル・モーザー (1853-1912) などの報道写真が挙げられる (図1)。そしてもう一つが、横山松三郎 (1838-1884) の写真 (図2) のように、江戸から明治へ、新しく都市が生まれ変わっていく中で古い建物を記録として残すという目的である。この時期の写真の特徴として、人物が意図的に写されていたものが多いことである。これは建物そのものだけでなく、そこにいる人や行為までを

「場」として写し込んだことだと言える。

やがて建築の保存のために建築家と写真家が協同し、「建築写真」というスタイルが生まれた。建築写真によって歴史的建築物は写真に写されるようになった。建築家の視線はそれまでには日本の写真にはなかった西洋的な「建築」という概念によるものであり、それが「建築写真」という表現として現れた。(*1)

その後、保存とは直接関係ない表現とし歴史的建築が写真に収められるようになる。そこには1930年ごろに興った「新興写真」というモダンな感覚で対象をとらえる写真表現の影響があったことが考えられる。

渡辺義雄 (1907-2000) は戦前は報道写真家としてという東京のモダン風景を対象に構成的なスナップショットを撮っていたが、ある時に建築と出会い建築写真家の草分けとなった。戦後、報道写真での客観的な視線と、新興写真でのモダンな感覚で伊勢神宮を撮影することとなった。それはそれまで隠すことに意味があった神宮の姿が写真によって新しく表現されることでもあった。

石元泰博 (1921-2012) による桂離宮は、ニュー・パウハウスで学んだモダニズムの視線を持った写真家が、桂をそれまでの日本的な視線ではない新しい見方を提示した。



図1. モーザー、東京、1872頃



図2. 横山松三郎、法隆寺、1872頃

第2章 建築としての民家

大正という時代、都市化が大きく進み、田舎と都市が分離されたとき、1917年、柳田國男 (1875-1962) らによって「白茅会」は結成され、民俗学の採集という方法と、建築学の実測という方法が出会って日本の民家調査は始まったとされている。今和次郎 (1888-1973) はスケッチ要員として参加した。当時は、特に民家内部の暗い空間では、スケッチが重要な記録手法であったことがうかがえる。白茅会『民家図集 第1輯 埼玉県』(1918) では、写真やスケッチで民家を表現した。表紙のスケッチ (図3) はやや視線が高く設定されていたりと、写真的な表現とは大きく異なっていた。また人を配置し民家を「建物+住人」として捉えようとしたことがうかがえる。白茅会から約10年後、1930年から1931年の12冊にわたって刊行された緑草会による『民家図集』は白茅会の資料を下敷きに、民家採集をたくさん写真によって記録したものである。緑草会は今や柳田ら白茅会のメンバーが監修として名前を連ね、代表の横山信という人物が採集や写真記録を行ったとされている。(*2) ここで写真によっておもに民家の外観が定量的に表現されている。また写真には民家の前に住人と思われる人物を配置して撮影しているものが多く (図4)、白茅会のスケッチと同じように、「建物+住人」という構図が見える。

その後、戦後の民家研究は民家をそれぞれ歴史的な古さなどを実証的に明らかにするものとなり、その成果は民家を文化財へと指定されたこととして現れている (表1)。



図3. 白茅会『民家図集』1918



図4. 緑草会『民家図集』1930

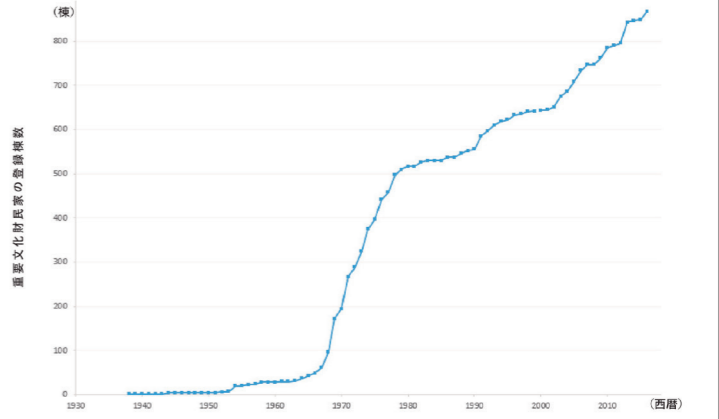


表1. 重要文化財民家の登録数の変化

(文化庁データベースをもとに筆者作成)

第3章 建築写真家による民家の表現

1950年代は建築ジャーナリズムが発達したが、そこには建築写真の表現が大きな影響があったと言えるだろう。また建築写真家という専門的な職業が確立した時期でもあったと言える。

1950~60年代にかけて建築写真家が民家を撮影し記録した、そこには大きく二つの背景があったことが考えられる。一つは民家が高度成長期という時代に向かう中で古い民家が失われつつあり、それらを記録しようとしたことである。もう一つは当時建築界で盛んだった伝統論争などの影響であり、建築界では日本の伝統的な建築が注目されていたことである。

民家を撮影した3人の建築写真家はそれぞれの背景を持ち、それぞれの目的で民家を撮影した。ここでは3人の写真家について、民家を撮り始めるまでの活動や経緯、最初の民家撮影、民家の探し方と目的、についてそれぞれ文献から抽出し分析した。

①平山忠治 (1909-2005)

・民家を撮るまで

『新建築』での現代建築作品の撮影 (1949年〜)→民家の撮影 (1954-62)

・最初の民家

白川の合掌造りの民家 (1954年)

・民家の探し方、目的

歴史的、民俗的背景にとらわれない、造形を追い求めた。

②二川幸夫 (1932-2013)

・民家を撮るまで

工業高校での建築の勉強 (1945〜51)→大学での建築史の勉強 (1951-1956)→個人的な民家採集、古典建築の撮影 (1956)→建築史家伊藤ていじと協同で『日本の民家』の採集、撮影 (1957-59)

・最初の民家

高山の日下部家住宅

・民家の探し方、目的

「美しい民家」という仮説のもと。徹底的で詳細な撮影。

③大橋富夫 (1932-2017)

・民家を撮るまで

実家の写真館でのスタジオ写真と、一方でのリアリズム写真→『建築文化』での現代建築の写真 (1957〜)→建築家西川驍とともに民家の採集 (1960〜64頃)

・最初の民家

九州地方の民家

・民家の探し方、目的

「人の気配」を探していた。高度成長期が迫り失われつつある民家や集落の姿を記録する疾走的な旅。

第4章 戦後民家写真の分析

本章では第3章で論じた3人の建築写真家による以下の写真集を対象に分析を行った。

- 平山忠治『民家』（彰国社 1962）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家』全10巻（美術出版社 1957-1959）
- 大橋富夫、安藤邦廣『大橋富夫写真集 日本の民家 屋根の記憶』（彰国社 2008.5.30）

4-1 地図における撮影場所のプロット分析

写真集に掲載された撮影地や民家をそれぞれ日本地

図上にプロットすることでその傾向を探り比較を行った。(図5) 平山は中部地方を中心に本州を横切るような範囲でのプロットが見えた。二川や大橋は全国的な範囲でのプロットを見ることができた。また二川の撮影した民家は後に文化財に指定されているものが多いことも分かった。

4-2 写真の類型による分析

撮影場所について写真を類型した。「内観」、「外観」、「集落・街並み」の3種類に類型し、それぞれの割合を明らかにした。(図6) 平山、二川については内観の割合が比較的多いことがわかった。大橋については外観や集落・街並みが多いことがわかった。

4-3 平面図における撮影地点と方向の復元

3著に登場する民家写真のうち、内観を撮影しているもので部分ではなく空間全体が撮影されたものを対象とし、その写真の情報をもとに平面図上にどの地点からどの範囲を撮影したものかを作図によって復元した。分析を行ったのは14件(平山忠治『民家』:3件、二川幸夫『日本の民家』:12件、大橋富夫『屋根の記憶』:1件)の民家について分析を行った。3著すべてに登場する岐阜県の日下部家住宅においては3著の特徴を直接的に比較することが可能だった。(表2) いずれにおいても土間のエリアから床へ向けられた写真が多いことがわかった。特に二川の写真においては土間から床へと上がり框に垂直な視線があり、ほかの民家分析をとおしてもこの視線は二川にのみ見られる特徴であることがわかった。

III. 結論

第5章 考察

幕末から明治にかけての外国人写真家や日本人写真家は日本の都市、建築を撮影した。当時、歴史的建築が写真によって撮影されたのは大きく二つの目的があった。一つはおもに外国人写真家による異文化への興味などの「報道写真」であり、もう一つは近代化へ向かう中での古い建物の「記録写真」である。彼らはフィールドにでて写真撮影を行ったが、同時に写真館を経営する写真師であった。そのためか建築や都市風景を写した写真であっても、演出的に人物を配置しているものが多い。写真館でのスタジオ写真と同じ感覚でフィールドでも持っていたと言える。

やがて建築家と写真家が建築保存という明確な目的の中で協同し、歴史的建築の撮影記録を行うようになると、人や行為は写す必要がなくなり、ものである建築だけが写されるようになり、「建築写真」という方法が確立していった。

民家において考えてみる。建築として民家を最初にとらえたといわれる白茅会では今和次郎はスケッチ要因として参加したが、その『民家図集』(1918)なかには写真も含まれている。その後、緑草会による『民家図集』(1930-31)では代表の横山信という人物によってたくさんの写真によって民家が撮影されることができるようになった。

1930年頃新興写真というモダンな感覚が建築をとらえはじめた。また建築ジャーナリズムとともに建築写真が大きく活用されるようになり、戦後には建築写真家という専門的な職業が確立した。1950年代、建築写真家は日本の伝統建築にまなざしを向け、日本建築に対して新しい見方を提示した。20年に一度の式年遷宮に合わせて撮影された渡辺義雄の伊勢や、アメリカから帰国後に撮影された石元泰博の桂はほぼ同時期である。また二川幸夫が初めて民家(日下部家住宅)に訪れたのも時を同じくする。1950年代から60年代にかけて行われた戦後建築写真家による民家の記録活動は、1966年頃からはじまる民家の文化財登録に先駆けた活動であったと言える。

歴史的建築物に対し、「建築」という認識が生成して、保存を通して建築写真が成立したという過程があったが、民家においてはそれよりも遅れて「民家の建築写真の表現」の成立の過程があると言える。戦後に建築写真が大きく飛躍し、「建築写真家」という職種が確立した時に、民家が「建築写真の方法」で写されるようになった。

そのなかでもそれぞれの写真家の表現の特徴や、目的を比較することができる。平山忠治は戦後の建築写真のスタイルを確立した建築写真家の一人であり、その表現はひと気を感じさせない即物的なものであり、その眼で戦後の日本に現れた新しい現代建築を表現した。民家写真における平山の表現も現代建築とおなじ姿勢が貫かれている。二川幸夫は建築史を勉強し、最初は古典建築へ興味を持っていた。ある時から興味を民家へと変えた。『日本の民家』では建築史家の伊藤ていじとの協同で民家を採集した。二川には日下部家住宅の梁組を一日中撮っていたことに象徴され、また内観写真が比較的多いことから時間もかけて詳細に撮影されたものが多いことが考えられる。後に文化財へ登録された民家も多い。またドマから上がり框に対して垂直な視線は二川のみにもみられる特徴である。大橋富夫の民家写真は外観ものも多く、霧、煙や光など民家の一瞬の表情が写っているものが多い。大橋は高度成長期の押し迫る時期に疾走的に民家採集を行ったことが考えられる。大橋は実家の写真館で得た演出写真家的な眼と、青年時代のリアリズム写真で鍛えた眼をもっていた。

報道写真と保存写真から始まった写真による歴史建築物の記録であるが、その後、建築写真という表現の確立によって民家へもそのまなざしが向けられていったという過程を考察することができた。

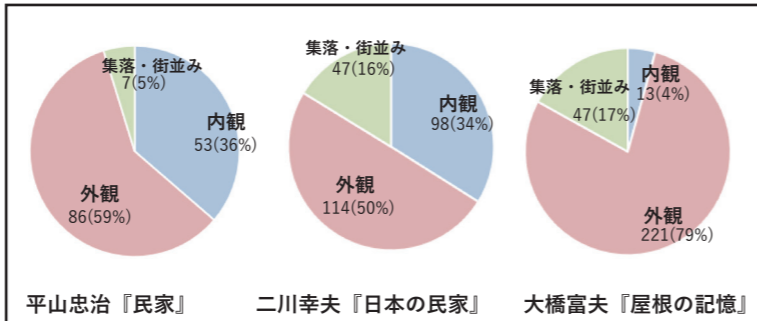


図6. 写真の類型による分析



図5. 地図による撮影場所のプロット分析

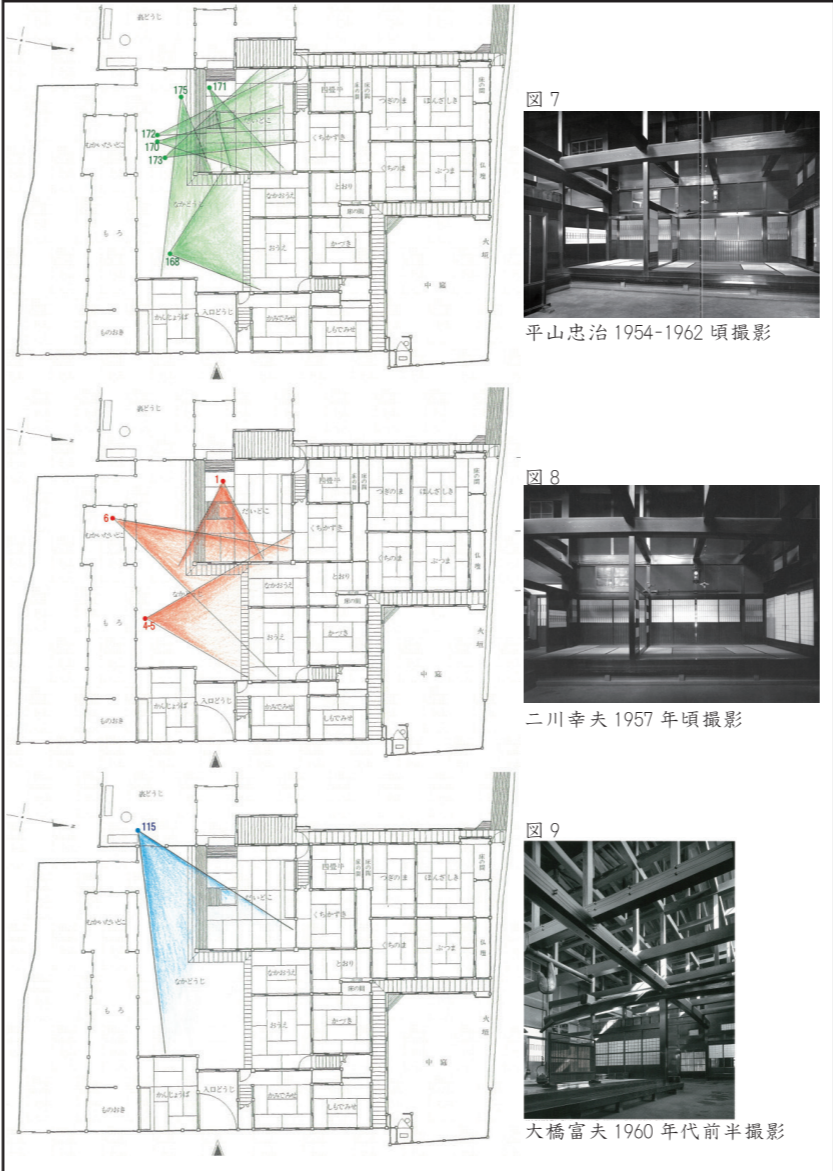


表2. 日下部家住宅における撮影位置と方向の復元

参考文献と関連文献

第1章

- 小沢健志『幕末・明治の写真』（ちくま学芸文庫 1997.7）
- 福屋粧子「建築写真の遠近法（パースベクティブ）」（『建築雑誌』1999.9）
- 金行信輔「写真のなかの江戸 絵図と古地図で読み解く20の都市風景」（ユウブックス 2018.2）
- ミヒヤエル・モーザー著、宮田奈奈、ベーター・パンツァー編『少年写真家の見た明治日本—ヒヤエル・モーザー日本滞在記』（勉誠出版 2018.6）
- 岡塚章子「近代の視覚と技術の探究者 横山松三郎」（江戸東京博物館『140年前の江戸城を撮った男 横山松三郎』2011.1）
- 清水重敦「建築保存概念の生成史」（中央公論美術出版 2013.2）
- 清水重敦「瞬間としての保存=写真 保存の始まりと建築の記憶」（『10+1』No.23、2001.3）
- 鳥原学『日本写真史（上）』（中公新書 2013.12）
- 金子隆一「写真の中の建築」全15回（『建築知識』1993-1994）
- 渡辺義雄、聞き手：藤森照信「伊勢を撮る」（『建築雑誌』1986.11）
- 渡辺義雄『渡辺義雄の眼 伊勢神宮』（講談社 1994）
- 飯沢耕太郎ほか『日本の写真家13 渡辺義雄』（岩波書店 1997.9）
- 内藤廣『著書解体』（INAX 出版）

第2章

- 今和次郎『日本の民家』（岩波文庫 1989.3）
- 古川修文ほか編『よみがえる古民家：緑草会編『民家図集』写真集』（柏書房 2003.1）

第3章

- 飯沢耕太郎『増補 戦後写真史ノート 写真は何を表現してきたか』（岩波現代文庫 2008.4）
- 浜口隆一「1956年の雑誌にあらわれた建築写真」（『建築文化』1956.12）
- 増田彰久『写真な建築』（白揚社 2003.11）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 大和・河内』（美術出版社 1957.12.25）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 高山・白川』（美術出版社 1958.2.1）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 武蔵・両毛』（美術出版社 1958.3.25）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 山陽路』（美術出版社 1958.5.10）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 信州・甲州』（美術出版社 1958.7.10）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 陸羽・岩代』（美術出版社 1958.1.1）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 四国路』（美術出版社 1958.12.25）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 京都・山城』（美術出版社 1959.3.0）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 北陸路』（美術出版社 1959.6.15）
- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 西海路』（美術出版社 1959.10.20）
- 大橋富夫、安藤邦廣『大橋富夫写真集 日本の民家 屋根の記憶』（彰国社 2008.5.30）
- 西川驥『民家の造形』（彰国社 1958）
- 平山忠治『民家』（彰国社 1962）
- 二川幸夫「建築写真20年」（建築雑誌 1972.10）
- 二川幸夫「建築を見る」（建築雑誌 1992.8）
- 二川幸夫「20世紀から21世紀へ」（建築雑誌 2001.1）
- 二川幸夫「徹底して建築を見続けること」（建築雑誌 2009.8）
- 山岸剛「歴史を書く眼：二川幸夫の建築写真について」（建築雑誌 2010.7）
- 戦後建築史学研究小委員会「戦後建築史家の歴史〈第7回〉伊藤ていじ」
- 大橋富夫、山岸剛「「建築写真はカタくない」（建築雑誌、2010.7）
- 大橋富夫、倉方俊輔「建築の表情を写す」（建築雑誌、2009.9）
- 大橋富夫、ほか「写真家の眼を通した建築」（住宅建築 2002.12）
- 大橋富夫ほか「建築写真家としての永年にわたる建築界への貢献と写真集『日本の民家 屋根の記憶』の刊行」（建築雑誌、2009.8）
- 益子義弘、原広司、山本理顕「追悼・大橋富夫さん 気配を撮る」（住宅建築 2018）
- 田尻裕彦「特別記事 写真家大橋富夫さんを悼む」（『ディティール』2018.7）
- 石山修武「世田谷村日記 R309」（<http://setagaya-mura.net/ishiyama.arch.waseda.jp/toppast/top0805.html>（閲覧 20181023））

図版出典

- 図1. 金行信輔『写真のなかの江戸 絵図と古地図で読み解く20の都市風景』（ユウブックス 2018.2）
- 図2. 江戸東京博物館『140年前の江戸城を撮った男 横山松三郎』（2011.1）
- 図3, 図4. 古川修文ほか編『よみがえる古民家：緑草会編『民家図集』写真集』（柏書房 2003.1）
- 図5.6. 筆者作成
- 図7. 平山忠治『民家』（彰国社 1962）
- 図8. 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家 高山・白川』（美術出版社 1958.2.1）
- 図9. 大橋富夫、安藤邦廣『大橋富夫写真集 日本の民家 屋根の記憶』（彰国社 2008.5.30）
- 表1. 文化庁データベースをもとに著者作成
- 表2. 日下部家住宅の平面図（出典：『日本の民家』（学習研究者、1981））をもとに筆者作成

註釈

- (*1) 清水重敦「建築保存概念の生成史」での指摘。
- (*2) 古川修文ほか編『よみがえる古民家：緑草会編『民家図集』写真集』（柏書房 2003.1）で古川氏によって述べられている。